

ブックガイド・児童精神医学のながれ

小澤 勲著

『自閉症とは何か』

本書は、雑誌「精神医療」に一九八〇年から八三年まで「わが国における幼児自閉症論批判」という表題で連載されたものにかなり手が加えられ、一九八四年に一冊の書として

悠久書房から出版され、当時、児童精神医学界でかなりの反響を呼んだものである。長い間絶版になっていったが、四半世紀を経てこのたび復刻版として再登場した待望の書である。

著者小澤勲氏は、現在では自閉症研究者としてではなく、認知症のケアについての実践者でありかつ論者として名高い。その著者が大学闘争に深くかかわるなかで、みずからの論文に対する自己批判を踏まえ、これまでわが国で行われてきた自閉症

研究の歴史を厳しく問い直そうとしたものである。

書名が「自閉症とは何か」となっているため、自閉症とは何かを論じているようにみえるが、実はそうではなく、連載の題目に示されているように「自閉症とは何か」について論じたものである（村瀬学氏の「あとがきにかえて」による）。医療現場で自閉症と呼ばれてきた発達障害（精神疾患？）を対象に研究してきた者たちが自閉症に対してどのような姿勢で臨んできたか、膨大な文献を渉猟しながら、その冒険の歴史を克明に追い続け、それに対してみずからの依って立つ基盤をも率直に語っている希有な書である。

周知のごとく、わが国の自閉症研

●評者
小林隆児 杉山登志郎
山登敬之

究はカナリーの提唱以後、当初の心因論の時代から、言語認知障害説の登場以後、器質論へと大きく舵を切り、今日に至っている。今では自閉症は脳機能障害を基盤にもつ発達障害であるとのコンセンサスが得られているように語られることが多いが、それは七〇年代以後の流れでしかなく、それまでは心因論華やかな時代で、家族に対して厳しい視線が向けられ、病因としての家族研究さえ行われていたのである。

今では過去のものとして完全に葬りさられているようにみえる心因論であるが、著者に言わせれば器質論へと原因論は変わっても、「自閉」に対する考え方は基本的になんら変わっていないと鋭く指摘する。あくまで「自閉」を子どもに閉じられた障壁とみなし、その原因が養育環境から個体の側へ乗り移っただけではないかという。

さらに、心因論から器質論へと自閉症研究者がこぞって大きく舵を切

った時、それまで心因論を主張していた者たちがなぜ器質論に転向したのか、その総括をきちんと行っただけという話を一度たりとも目にしたことがないと、厳しく問いかけている。

研究に従事する者が長年の間にさまざまな変節をとげることが、決して少なくはないだろう。過去の研究が現時点では的外れであったことを、今になって取り上げ批判するのはフェアでないと思う。過去に発表された研究は、その時の研究者の考え、つまりはカレント・オピニオン（current opinion）である。著者もそのこと自体を糾弾しているのではない。

しかし、心因論から器質論へ、一八〇度もの転回はあまりにも大き

自閉症とは何か 小澤 勲
学説批判から自閉症児処遇の現場へ、幻の大著がその全貌を現す！
本書は、雑誌「精神医療」に一九八〇年から八三年まで「わが国における幼児自閉症論批判」という表題で連載されたものにかなり手が加えられ、一九八四年に一冊の書として出版されたものである。児童精神医学界でかなりの反響を呼んだものである。長い間絶版になっていったが、四半世紀を経てこのたび復刻版として再登場した待望の書である。

洋泉社、2007年
5670円（税込）

い。研究者として大切なことは、過去から現在までの己の主張がどのように整合性を保ち続けているのか、このことについては自覚的であるべきだし、そのことをなんらかの形で明示することは、学界からも社会からも求められているといってもよいだろう。

本書で著者が一貫して主張していることは、一つには、「自閉」を子どもの属性としてではなく、治療者と子どもとの関係の問題として、あるいは「自閉」とは何かを追求するためには、臨床現場のみならず生活場面でも、子どもと真摯に向き合い、己との関係の質を問い続けることが大切なのではないかと主張する。その努力をせずして、安易に「自閉」を子どもの側の問題としてみずからの関係から切り離し、生物学的次元のみに還元している現在の自閉症論には厳しい視線を向けている。

第二に、自閉症に関する学説を社会的文脈でみることに、具体的には自閉症が社会の中でどのように処遇さ

れてきたか、その流れと対応させながらみていくことで理解を深めようとする。

本書は八〇年代前半までの歴史で終わっているが、わが国の今日の状況をみる限り、著者の主張はほとんど色褪せていない。正鶴を射ているといってもよいほどである。著者の眼力の鋭さを証明するものではあるが、われわれ自閉症研究に多少なりともかかわってきた者たちにとつては、著者の問題提起にいまだきちんと答えていない現状は恥ずべきことかもしれない。脳の世紀に突入した今日、著者が憂慮した事態はより深刻化しているのではないかとも思う。

本書を読みながら評者自身、過去の忘れがたい記憶がよみがえってきた。わずか十年あまり前のことだが、当時、評者が自閉症を「関係障碍」とか「愛着」の視点で発表した時にはまるで母原病であるかのように決めつけられ、激しく批判（非難？）されたものである。それが今や、「関係（性）」も「愛着」もまるで流行の兆しさえ見せ始めている。この変貌ぶりは何かと思う。学説の

流行に流されることなく、みずからの依って立つ臨床現場での取り組みを深めていくことがなにより大切ではなからうかと思う。

著者が本書をまとめたのは四十年代前半である。大学闘争が衰退期に入り、あふれるようなエネルギーが社会から次第に失われつつある時期に、著者は熱い思いを込め、時に激しい論調で五〇〇頁を越す大著を一気に論じ切っている。科学的とされる学説がわずか半世紀余りの中でどのような変遷を辿ってきたか、その社会的文脈を通して理解することは、みずからの研究者としての立場を見直す契機となろうし、家族にとつても目まぐるしく変わる学説に翻弄されないために必要なことであろう。

復刻版としての再登場に至るまでの経緯について、当初、著者は乗り気ではなかったという。一つには著者自身の健康上の理由もあったが、それよりも大きかったのは自分のことばで語っていないこと、つまりは実践のみずからの主張を十分に裏づけることができなかつたことによるためらいがあつたからだという。

本書の最初の発刊後、著者は自閉症の臨床現場から（評者からみると）突然姿を消し、しばらくして認知症老人のケアの現場に生活の拠点を移した。これから著者が自説をどのように展開するか大いに期待していた評者にとつてその時の失望は大きかつたが、その後の著者が、ケア現場の実践から生み出したケア論のみずからのことばで語っているのを知り、臨床家としての一貫した姿勢に改めて深い感動を覚えたものである。

最後になるが、本書（のみならず、本誌で以前評者が取り上げた書も含め）の復刻版の出版という英断を下した出版社とその仲介の労をとつた村瀬学氏に敬意を表したいと思う。